

JAF AE Newsletter



No. 23 (October 2007)

特別報告・第1回 ESSC (The Extremely Short Story Competition) を終えて

実行委員長 竹下裕子
(東洋英和女学院大学)

学会創立 10 周年記念行事の一環として企画・実施した第 1 回 ESSC が無事終了いたしましたので、誌面をお借りし、まとめのご報告をさせていただきます。

あらためてご紹介する必要もないとは思いますが、ESSC は Peter Hassall 氏 (アラブ首長国連邦ザイド大学) の発案によるもので、「極めて短いストーリー」を通じて英語学習者のライティング力の向上をめざすことを主な目的とした創作活動のコンテストです。アラブ首長国連邦における ESSC は 150 名のザイド大学在学学生による 250 作品の投稿を得た 2004 年度のコンテストに始まり、現在に至っています。なお、Hassall 氏を中心とするザイド大学におけるコンテストは、投稿作品の扱いや投稿者の資格など、いくつかの点で異なります。ESSC UAE 2007 のウェブサイトをご覧になると興味深いと思います。ウェブサイトの情報は、他の参考文献とともに、文末に記しますのでぜひご参照ください。

さて、アラブ首長国連邦で誕生した ESSC は本名信行会長が日本に「輸入」し、本学会主催で実施される運びとなりましたこともご説明するまでもありません。本学会は ESSC 実行委員会を組織し、実施に向けて数々の準備をしました。初期の実行委員会は 2006 年 7 月、ESSC UAE 2004 の投稿作品を掲載した *Emiratia: World English Voices of Emirati Women* をベースにした日本版オフィシャルガイドブックを出版しました。この本には、本名会長と実行委員会による「日本版オフィシャルガイドブックのご案内」と Hassall 氏の "Preface by the Editor" の竹下による日本語訳が掲

載されています。この出版を担当した第一期実行委員会は、田嶋ティナ宏子、榎木蘭鉄也、河原俊昭、徳地慎二の各会員と竹下 (実行委員長) で構成されていました。当時の 4 名の実行委員の多大なご尽力に対して、心より感謝申し上げます。

このガイドブックの出版により小額の印税収入がありました。今後、ESSC が国際的な大会として展開していくなかで、実行費用の捻出に困難をきたす国や地域があった場合、この印税収入を実施の支援に充当することが Hassall 氏と学会の間で約束されています。

アラブ首長国連邦版に倣い、本学会主催の日本版 ESSC を ESSC Japan 2006 と称することにします。ESSC Japan 2006 は、日本における第 1 回大会として、第二期実行委員会を組織したうえで、入念に準備を進め、2006 年 10 月 1 日より 12 月 31 日の期間に実施し、3 段階におよぶ厳正な審査を経て受賞作品を決定・発表し、表彰を終了しています。第二期実行委員会は、実施準備から 2007 年第 21 回全国大会までの ESSC 関連のすべての作業にかかわった岡裏佳幸、藤原康弘、三宅ひろ子、鈴木夏実の各会員、2007 年 3 月まで加わっていた徳地慎二委員、そして竹下 (実行委員長) で構成されていました。貴重な時間と多大な労力を費やし、多くの知恵とアイデアを学会に提供してくれた実行委員のご尽力なしには、本学会による ESSC の実施は有り得ませんでした。5 名の第二期実行委員に対して、心より感謝申し上げます。

第二期実行委員会は、実際の応募受付と作品の整理に加え、実施の前後に、次のような作業を担当しました。①学会ウェブサイト内 ESSC 関連ページの作成、②応募フォームの作成、③応募受付

システムの構築、④後援団体への支援の依頼と各種広報活動、⑤審査システムの構築、⑥受賞者・受賞作品の発表の準備、⑦問い合わせへの対応。

学会ウェブサイト内の ESSC 関連の複数ページの作成や応募フォームの作成などには、学会全体のウェブサイトのリニューアルを担当くださった有限会社すずき印刷の鈴木達哉氏に大変にお世話になりました。鈴木氏には全国大会や実行委員会会議にもご出席いただき、何百通にも及ぶ実行委員会内のメール文書のやり取りにも加わって ESSC への理解を深めていただいたうえで、さまざまな作業を担当していただきました。誌面をお借りし、心よりお礼申し上げます。

後援団体として名乗りを上げてくださった団体は 8 社に及びました。ESSC ガイドブックの出版元である(株)エドベック、大修館書店『英語教育』編集部、日本英語検定協会、(株)ベネッセコーポレーション、ピアソン・ロングマン、(株)Z会、(株)Cambridge University Press Japan、(株)アルクには後援団体として、実施にかかわる資金援助および広報活動に大きなお力をいただき、さらに(株)オックスフォード大学出版局には賛助団体として、教育的価値の高い辞書を賞品として提供していただきました。各社に対して、あらためてお礼申し上げます。

前述のとおり、審査は 3 段階にわたって行ないました。第 1 段階の予備審査(実行委員会担当)と第 2 段階の本審査(学会理事有志担当)を経た優秀作品は、実行委員会が依頼した 2 名の特別審査委員、本名会長、竹下実行委員長の計 4 名が最終審査にあたり、受賞作品を決定しました。最終審査の特別審査員は、ESSC 考案者の Hassall 氏と ESSC の主旨にご賛同くださり、応援してくださったアリゾナ州立大学の Paul Kei Matsuda 氏のおふたりでした。難しい審査をお引き受けくださいました特別審査員のおふたりと本名会長、たくさんのお本審査進出作品を読み、悩んだ末の結果をくださった理事審査員の皆様、大変に有難うございました。

さて、ESSC Japan 2006 は、ザイード大学とは異なり、応募者を特定の大学の学生に限らない、全国規模の大会としました。よって、応募者は中

学生から高齢者まで、多岐多数にわたりました。応募総数は 750 作品でしたが、うち、投稿規定に合わない作品を除く 614 作品を有効応募作品とみなし、審査の対象としました。また、有効作品のうち、289 作品が中学生と高校生による作品でした。審査部門は応募者の多様性に合わせ、①大学生・一般の部、②高校生の部、③中学生の部の 3 部を設け、それぞれの優秀作品を選定しました。

審査の結果、入賞作品として選ばれたものは以下のとおりです。

大学生・一般の部

日本「アジア英語」学会会長賞：水野愛美さん(東京都)の Tears

ピーター・ハッサル賞：鈴木泰輔さん(東京都)の Fire in your mouth

優秀賞：木村友紀さん(神奈川県)の Sunflower、鹿目はるかさん(東京都)の My Family、服部謙治さん(神奈川県)の You and I were childhood friends、喜多川久美さん(神奈川県)の The Rainbow、阿部菜穂子さん(東京都)の The night tale の 5 編

優良賞：Y.A.さん(神奈川県)の The wave、古野晶子さん(東京都)の Nature of Mother、Y.A.さん(山梨県)の Why she was crying?、渡邊千早さん(新潟県)の Do you know who you are? の 4 編

佳作：倉田真希さん(神奈川県)の Sharing ほか 8 編、計 9 編

高校生の部

日本「アジア英語」学会会長奨励賞：座安乃菜さん(沖縄県)の The Life of Eighty

ピーター・ハッサル奨励賞：諸見里真美さん(沖縄県)の SOAP BUBBLES

ESSC 実行委員会奨励賞：仲里有加さん(沖縄県)の My Wonderful Pen

優秀賞：佐立浩明さん(香川県)の“UDON”

優良賞：宮城彩香さん(沖縄県)の Dream と知念福子さん(沖縄県)の Tom and Jack

中学生の部

最優秀賞：大久保里々伊さん(東京都)の I want to tell things...

優秀賞：樽島萌さん(東京都)の My friends と

M.N.さん（長野県）の A cloud

受賞作品はまず、学会ウェブサイトで発表し、2007年6月の第21回全国大会においても再度発表し、受賞者と受賞作品を称えました。以下にご紹介する2編の大学生・一般の部の受賞作品については、全国大会でのESSC関連のご報告において、受賞者ご本人による作品の朗読の録音音声も披露したため、大会参加者には受賞作品を目のみならず耳でも楽しんでいただきました。受賞なさった皆さんにはあらためて大きな拍手をお送りしたいと思います。そしてもちろん、受賞には至らなかった多くの作品に対しても、健闘を称えさせていただきます。

受賞作品のうち、大学生・一般の部においてもっとも優れた作品であると認められた2編と、高校生の部においてもっとも優れた作品であると認められた3編のうちの1編をここにご紹介します。日本「アジア英語」学会会長賞：水野愛美さん（東京都）



ピーター・ハッサル賞 1編：鈴木泰輔さん（東京都）



日本「アジア英語」学会会長奨励賞：座安乃菜さん。



また、最終審査員のうちの3名にはESSC Japan 2006に寄せるコメントの執筆を、同様に extremely short story の形式でお願いしましたところ、つぎのような「優秀な」short story をいただきましたので、合わせてご紹介いたします。Peter Hassall 氏より

The ESSC Japan 2007: A Precious Celebration

From the sands of the Emirates to the Land of the Rising Sun,
Tiny gems are arising encapsulating our hopes, fears, lives, and fun.
As history rises, World Englishes grow(s) from strength to strength.
Without our native languages, without differences, WE would be impoverished.
Let's celebrate diversity while WE may!
Peter H, UAE 2007

Paul Kei Matsuda 氏より

The Will to Write

"It's too early for my students to write,"
I have heard teachers say.
More words, more structures,
more this, more that...

But I beg to differ, seeing these works thoughtfully crafted with colorful words and cheerful images, or quiet hue and gloomy phrases, and a touch of brilliance and originality.

Paul Kei Matsuda

本名会長より



ESSC のその後については機会をあらためてお伝えするとして、今回のところは、第 2 回 ESSC を 2007 年 5 月 15 日より 11 月 15 日までの日程で開催していることに加え、2007 年 7 月に中国・ハルビンで開催された International Conference on Cross-cultural Communication (ICCC)において ESSC の普及活動を兼ねたパネルディスカッションを実行委員会が展開し、中国人英語学習者からの応募受付をお約束してきたことをご報告させていただきます。よって、ESSC 2007 は日中国際大会であるご理解ください。

第 1 回 ESSC には多くの関心が寄せられ、多くの応募をいただき、大変に嬉しく思っています。今回のコンテストには、中学生から 60 代のベテラン英語ユーザーまで、多様な方々からの応募をいただいたことでもわかるとおり、ESSC はさまざまな立場の英語学習者および英語のユーザーに取り組んでいただくことのできる教育的な活動です。中学生や高校生には、50 語による作文だったら挑戦してみようという励みになるかもしれません。50 語によるストーリーライティングは、数千語によるエッセイライティングの課題よりもずっと取り組みやすいと考える大学生も多くいることでしょう。逆に、自由に長々と書いていくほうが、50 語ぴったりに思いを込めるよりも楽であると考えられる学習者もあるかもしれません。

いずれにせよ、ESSC Japan 2006 は多くの人々に創作と挑戦の動機を与える機会であったと確信しています。今後とも、日本「アジア英語」学会がそのような有益な機会の提供者、企画者、ある

いは開催者として関与し、この教育活動がますます広がりをみせるよう望まずにはられません。

最後に、7 月半ばに飛び込んできた悲報についてお知らせしなければなりません。全国大会における受賞作品の発表を終え、第 1 回 ESSC の業務をほぼ終了してほっとしかかっていた実行委員のもとに、日本における ESSC の実施に大きな関心を寄せてくださり、日本の学習者による応募作品に基づいてコーパスの作成に当たってこられた Jon Hassall 氏 (Peter Hassall 氏のご子息) ご逝去の知らせが飛び込んできました。本名会長と実行委員会は、本学会の会員一同に代わり、心からの哀悼の意を表しました。Jon Hassall 氏の遺作となりました *Rays of the rising sun* は、アラブ首長国連邦と日本で生み出された作品を多数掲載した美しい本です。ぜひご覧いただきたく、ご紹介させていただくとともに、Jon Hassall 氏のご冥福を心よりお祈りいたします。



ESSC 関連の出版物やウェブサイトの情報

会員各位や指導学生さんがたのニーズに応じて、ご利用、ご参照ください

ウェブサイト

日本「アジア英語」学会 ESSC ページ

<http://essc.fit.ac.jp/index.html>

ザイード大学 ESSC ページ

<http://www.kalmen.com/50words/home/index.php>

(株)エドバック ESSC ページ

<http://www.edvec.co.jp/research-institute/essc/index.htm>

出版物

Zayed University 発行、2004 年、*Emiratia: World English Voices of Emirati Women*.

日本「アジア英語」学会発行、2006 年、*Emiratia: World English Voices of Emirati Women ~JAF AE's Official Guidebook to the Extremely Short Story Competition~* (エドバック制作)。

Peter Hassall, "International Collaboration to Promote Literature and Linguistics via the Extremely Short Story Competition (ESSC)" (*Asian Englishes*, Vol. 8, No. 2)

Yuko Takeshita, "Make It Extremely Short, Please!" (*Asian Englishes*, Vol. 9, No. 1)

Jon Hassall 編、2007 年、*Rays of the rising sun*.

シンガポール・レポート

田嶋ティナ宏子 (白百合女子大学)

シンガポール英語では、単語の最後の子音が発音されないことや、lah や hor といった助詞がつくことは、みなさんすでにご存知だと思う。最近では、r が l と発音されることが多いのが目立つ。これは、数年前に放映された *Phua Chu Kang* の影響が大きいとされる。(ちなみに、このドラマは、今でも再放送され、好評である。) 私は今年サバティカルでシンガポールにいるのだが、Speak Good English Movement は毎年それなりに行われてはいるが、シンガポール人は、やっぱり Singlish を話すことで自分たちのアイデンティティを確かめている。以下は、Little Red Riding Hood (赤頭巾ちゃん) のシングリッシュ版である。こういった英語をできるだけ排除したいと政府は考えているのだが、最近始まったテレビドラマでも、またまたシングリッシュ連発になっているので、政府はまた頭を痛めているに違いない。

Little Led Liding Hoot

Once upon a time hor, got one girl Little Led Liding Hoot. She want to go to Ah Mah's house. Morning alleady she go out one, she got take come one basket to put flower. She don want to walk long-long so go take shot cut. Wah!!! she

dono got one animal follow her one hor! She happy-happy walk until she come to Ah Mah's house. "Ah Mah! Ah Mah! I come, open the door leh?" she talk. Then Ah Mah also talk back, "Come in, lah. I never close one" Little Led Liding Hoot open the house and go inside door... Oh, solly solly... open the door and go inside the house, she got see her Ah Mah on top of the bed. She go ask Ah Mah.

"Ah Mah, how come your eye vely big one hor?"

"So I can see you, maahhhhh!!!" Ah Mah say back.

"Ah Mah, how come your ear vely long one?"

"So vely easy to hear you one laah!!!!"

"Ah Mah, how come....."

"Aiyaa!!!! SO many question one, ah you.... never die before leh?"

"Soly, lah, Ah Mah, I dono, mah, that's why I ask".

"What solly-soly! Now I want to eat you, I not Ah Mah, I animal one you know."

Wah! Little led liding Hoot vely scared one, she scleam vely loud but late alleady, the animal alleady eat her. She now inside stomach one.

(注) Ah Mah: おばあちゃん、alleady=already、dono = don't know、solly=sorry、vely=very、scleam=scream

ベトナム・レポート

Tajima, Tina Hiroko (Shirayuri College)

I spent six days in Ho Chi Minh, Vietnam in September. I expected to see some countryside scenery with people riding water buffalos in their rice fields, but NO. Ho Chi Minh City is the largest city in Vietnam and certainly the economic center in the country. Hanoi is the capital city of Vietnam, but Ho Chi Minh is faster paced, as more foreign investments have flowed in in the recent years, mainly from Korea, Singapore and Hong Kong. Streets have an amazing amount of traffic – both cars and motor bikes – and there are no such things as traffic rules here. You can

make u-turns in the middle of the street, even if a flood of traffic is coming toward you from the other direction. Motor bikes cut in and run on the wrong side of the street honking away and no one, just no one complains about it. And then, there are cyclos. They are like rickshaws, but the big difference is the passenger sits in the front and the driver sits in the back and pedals away the bicycle with an unexpectedly skillful way through those cars and motor bikes.



Ho Chi Minh City was formerly Saigon, but renamed in 1975 by their independence leader Ho Chi Minh. It is a communist country, but in the city you'd be amazed to see the developments and freedom people have. I walked around and talked to many local people. I "sneaked in" one of the primary schools in the city and talked to some students in English, but they could not understand what I was saying, even though I repeated the questions many times VERY slowly. They supposedly have English lessons from the first grade, but it seems it depends on the school and the principal. One girl came up to me on the street one day and tried to sell some postcards. She was 10 years old and spoke rather good English, so I asked how she acquired her English. With a smile, she said "On the job!" Ah... yes, on-the-job training is always (most of the time, I should say?) better than school education! I asked her if she went to school. She said, "Of course! Are you crazy?"

If you don't go to school, you can't get good job later! My school never teach English. No English class. I teach my friends English and get money from them. I already have my own business!" She then added, "I teach you about me, so buy postcards from me!" Amazing talent!

English is booming in this city, so are Japanese and Chinese. There are numerous language schools all over the city, but most of them have Vietnamese teachers teaching the languages, because "it's too expensive to hire 'foreigners'." But those schools are usually owned by what they call "vietkiew," or rich Vietnamese returnees who spent some time in the U.S. or elsewhere, made some money and returned to their own country with a foreign passport or permanent residency overseas. And they hire "backpacker teachers" who visit Vietnam for a month or so and teach English to cover their airfare and travel around Vietnam or "expat wives" whose husbands work in Ho Chi Minh for a few years. In any case, they are far from qualified English teachers.

There aren't many books or materials on English language teaching in Vietnam in English nor Japanese. It'd be interesting to spend some good amount of time there to do some research on English language teaching. Six days were just not enough.



和製英語に対する 学生たちのプラス思考

小野礼子（神戸海星女子学院大学）

九月に滋賀県で大学のゼミ合宿を行った。参加した8人の学生たちは各々の卒業論文の中間発表を行ったが、そのうちの一人が和製英語に関する発表を行ったため、その後、学生たちに和製英語について英語母語話者から間違いであるとの指摘を受けたら、どのように答えるかを聞いてみた。学生たちの答えは、和製英語は日本語として日本語母語話者同士のコミュニケーションのために使われているものであるから、英語母語話者がとやかく言うことではないというものであった。また、和製英語は「オーダーメイド」「ノースリーブ」のように、日本語母語話者には（made-to-orderやsleevelessよりも）わかりやすかったり、「フリーター」（厳密には英語 free + ドイツ語 Arbeiter の和製洋語）のように、「定職に就かずにアルバイトをしています」と言うところを「フリーターです」とひとことで表現でき、しかも free という響きが「定職に就かない」というマイナスのイメージをカバーするため、便利であったりするという意見も出た。

最近「アウトソーシング」「アカウントビリティー」「コンプライアンス」など、一般の人々にはわかりにくいカタカナ語をよく見聞きするが、これらは英語の意味と（日本語化してはいるが）音とをそのまま借用したものである。これに対して和製英語は日本語母語話者が編み出した創意工夫の賜物である。和製英語というと「英語習得の妨げ」や「正しくない英語」といった否定的な見方をされることもあるが、学生たちは和製英語を自分たちのことばとして肯定的にとらえており、この和製英語に対する学生たちのプラス思考がこれからの日本の英語に対する考え方につながっていくのではないかと思い、ささやかな喜びを感じた。

Kachru (1986, 1992) は、Expanding Circle に属する日本の英語は performance variety であるとして、Outer Circle に属するインドやシンガポ

ールの英語、すなわち institutionalized variety と区別している。そして、英語の多様性を acquisitional、sociocultural、motivational、functional の四つの観点からとらえることで institutionalized variety の妥当性を説いている。この四つの観点から日本の英語を考えると、「インド英語」「シンガポール英語」と同じように「二ホン英語」という名称を用いてその特徴を挙げることは容易ではないように思われる。ただ、日本の英語について、それに対する肯定的な態度を養う一つの手段として、学生たちにはこれから国際英語を使用して和製英語をアジアの人々に紹介してほしいし、たとえば「韓製英語」や「タイ製英語」を韓国やタイの人々から教えてもらい、それぞれの文化における英語に関する独自性や言語の創造性・普遍性を発見していくと同時に、アジアの人々とのコミュニケーションを深めてほしいと思っている。

[参考文献]

Kachru, Braj B. (1986) *The Alchemy of English: The Spread, Functions, and Models of Non-native Englishes*. Oxford: Pergamon Press. Reprinted, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1990.

Kachru, Braj B. (1992) Models for non-native Englishes. In Kachru (Ed.), *The Other Tongue: English across Cultures*. 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp. 48-74.

Book Review



『外国人と一緒に生きる
社会がやってきました!』
河原俊昭・山本忠行編
くろしお出版
2007年
ISBN: 978-4-87424-369-5
価格 1,260 円(税込)

評者：猿橋順子（青山学院大学・非）

本著は、在住外国人が200万人を超える日本社会の、多言語・多文化・多民族共生の課題を身

近なところから提示し、将来的な方向性を示唆する。登場人物は、小学生、高校生、大学生の好奇心旺盛な子ども達と、両親、父方の祖母の6人からなるスズキさん一家。場面はお茶の間である。

「バス停横のアパートだけど、最近外国人が住むようになったわね」

という母の何気ない一言から対話が展開する。世代や帰属社会の異なる家族のメンバーがそれぞれの生活場面で直面した、外国や異言語につながる人、知識との接触、その出来事が生んだ感動や困惑、摩擦が取り上げられ、時に先生や友人を交えながら、意見が活発に交換される。

話題は、外国人住民を生活者として捉えた時に浮かび上がる生活やコミュニケーションの諸相を皮切りに、バイリンガリズム、英語教育、日本語の国際化へと展開する。豊富な話題が、オムニバスで登場する合間には、「外国人」をめぐる呼称の問題や、身近な同源のことはの紹介など、ことばの魅力を伝えるコラムが充実している。

確かに、数字上、日本で生活する外国人の数は増加の一途を辿っており、それに応じて多言語・多文化と共存していく観点を育むことの必要性は広く叫ばれている。ただし、数の上での増加はきっかけのひとつに過ぎず、肝心なのはひとりひとりのことばへの向き合い方にある。ことばの問題を小さなこととして捨て置かない態度、ことばの諸相をきっかけに話者を取り巻く状況への想像力を働かせることなどである。外国人と一緒に生きる社会は、移り住む外国人の増加と共に「やってきた！」ものであると同時に、日本人の心の中から「やってくる！」ものではないか。そんな印象を読者に与える一冊である。

さて、本を読むときに、常々「本著を教材としてどう活用できるか？」という発想から抜けきれないのが、私の悪い癖でもある。本著のメッセージをより生き生きと伝えるために、高校生や大学生が、教室内で実際に声に出して役を演じてみる、さらに独自のシナリオを作成し、互いに発表しあうという試みに挑戦したいと思った。昨年、神奈川県国際交流協会で開催されたフィリピン教育演劇協会のワークショップに参加した。最初は恥ずかしくて口先だけで台詞を言っていた参加者が、

徐々に演じている役割に共鳴していく。擬似的にはあるが、相手の立場に身を置く体験は、異文化へのアウェアネスを高めるのに有効であると体感した。本著を基礎文献に、知識として蓄えるだけに終わらない多言語・多文化共生の学びを、教室内で実践してみたいと思う。

スズキ家のお茶の間を覗き見る形となっている本著は、そこで提示される課題について、共に考えさせられると同時に、繰り広げられる人間模様にも吸い込まれていく感覚を味わう。読み進むうちに、いつか何かのきっかけで、外国人がスズキ家を訪れる場面を心待ちにしていたが、訪れるのはお父さんの義兄にあたる杉田教授ばかりで、ついに一度も外国人が訪れることはなかった。本著は『世界の言語政策』、『多言語社会がやってきた』（いずれも、くろしお出版）の続編という性格を持っているということだが、いつかスズキ家が実際の多文化共生の実践に右往左往し、さらに言語意識への気付きを高めていく場面が見られる日を期待してやまない。



『英語教育原論』
寺島隆吉著

明石書店

2007年

ISBN: 978-4-7503-2562-0

価格 2,600円（+税）



評者: 仲 潔 (九州女子大学)

本学会員である寺島隆吉氏によって『英語教育原論』が2007年8月に明石書店より刊行された。本書の最大の特徴は、一貫して「教育」というものが政治や経済とは切り離せないという観点から、日本の英語教育におけるさまざまな問題が考察されている点であろう。本書の内容が私の趣味に合致したことも理由なのかもしれないが、読者をひきつける明快な論理と力強い主張がうまく融合されており、複雑かつ広範な問題を扱っているにもかかわらず、本書を手にした読者は一気に読み終えてしまうだろう。

本書は3つの章から成り立っており、それぞれ

れ「英語教師の『三つの仕事』『三つの危険』」、「日本の言語政策と学校教育」、「日本の小学校英語教育を再考する」である。まだ本書を手にしていない読者のために、私なりに各章の要点をまとめておきたい。

第1章では、英語教師の3つの仕事として、①「『英語だけが外国語ではない』と教えること」、②「英語を学び続ける夢を育てること」、③「英語はこうすればものになる」という道筋を示すこと、があげられている。いずれの点においても私自身、非常に共感しながら読むことができた。私事で恐縮であるが、入学ときに英語嫌いだった学生が、英語に強い関心を抱くようになり、今春よりカナダに留学することになった。また、私は学生から「もっと早く先生の授業を受けていたら英語嫌いにならなかつたかもしれない」といった手紙を何度かいただいたことがある。念のために断っておくが、英語の世界性を強調するような動機付け（例えば、「英語ができれば～できる」等）は決して行っていない。日々の授業で学生への動機付けに苦労する経験は、英語教師であれば誰しもあるだろうが、本章を読めば、その糸口がつかめるであろう。私自身、おぼろげであった自らの英語教育スタイルが明瞭になり、また再考する契機となった。

第2章および第3章では、経済的・政治的観点から、JETプログラム問題や小学校での英語教育という2つの言語政策が中心として取り上げられている。日本の昨今の経済不振を理由に英語教育の強化を主張する世論があるが、本書が提示するような批判に果たして耐え得るであろうか。これら2つの言語政策を「愚策」とする論拠は教育的見地からもなされている。なお、本書の優れている点は、単なる批判に留まるのではなく、建設的な議論を展開しており、代案も提示されていることである。

昨今の英語教育界の言語政策は、経済と政治の観点からのみ作られた、完全に破綻した教育イデオロギーである。「時勢」を読み取り、安易にJETプログラムや小学校への英語教育導入といった2つの言語政策に賛成することは、一定の支持を得やすい。しかしながら、本書のようにどっ

しりと英語教育の根本を捉えなおす議論が、実は真の意味での英語教育の活性化に繋がるのが確信できるであろう。すべての英語教育関係者にとって、必読の1冊であると思われる。

連載シリーズ

日本「アジア英語」学会の歴史③

河原俊昭（京都光華女子大学）

2000年を迎えて、第7回大会が青山学院大学で開催された。基調講演は鈴木孝夫氏による「日本における『英語第2公用語論』の問題」であった。当時話題になった「英語第2公用語論」に関して、鈴木氏が独自の口調で、200人を超える聴衆に語りかけたのであった。この年の7月から、会員の研究奨励を目的として、モノグラフシリーズが刊行された。第1号が、本名信行氏、竹下裕子氏、田嶋ティナ宏子氏、吉川寛氏、榎木蘭鉄也氏の論文を集めて刊行された。以後、毎年1冊ほどの頻度で刊行されており、値段が500円前後と手頃なこともあり、各方面から広い需要がある。

特筆すべきこととして、この年から会員の研鑽と親睦を目的として海外研修旅行がはじまったことを挙げたい。第1回目の訪問先として、インドが選ばれた。ムンバイ、ハイダラバード、デリーの三都市を10日ほどかけて訪問した。訪問団は、榎木蘭鉄也氏が留学したCIEFLを訪問して、インド英語の権威の諸先生たちから直接話を聞くことができ大変有意義な旅行となった。

第8回大会は、中京大学で開かれ、講演はSadtono氏による「Program Evaluation of Foreign Language」であった。次の第9回大会は、東洋英和女学院大学で、講演は末延岑夫氏による「日本英語30年」であった。第10回大会は、2001年の12月に、金沢経済大学で行われた。今まで全国大会は関東・関西圏でのみ行われていたが、はじめて地方都市で開催された。講演はフィリピンのMaria Lourdes Bautista博士による「English in Contact with Philippine Languages: Taglish and Philippine English」であった。また、この年、会員による連絡を図るためにメーリング

リストが立ちあがった。メンバーになった会員は頻りに情報交換を行って、きわめて有益であったが、商業広告が次第に増えて数年で閉じられたことは残念であった。

その後の全国大会だが、第 11 回大会は白百合女子大学で開かれ、Saran Kaur Gill 博士による講演「Language Policy and English Language Standards in Malaysia」があった。第 12 回大会は天理大学で、講演は日野信行氏による「『国際英語』研究の体系化に向けて：日本の英語教育の視点から」であった。

2002 年に、『事典アジアの最新英語事情』が大修館書店から発刊されたことは本学会の歴史にとって大きな出来事である。本名信行理事長を编者として、会員 15 名が執筆した事典であり、この本は、アジアの英語事情を知ろうとする人にとっては、たちまちのうちに、必須の資料になった。2003 年以降の歴史は、次号にて紹介する。

(続く)

事務局からのお知らせ

1. 年会費納入のお願い

本年度および本年度以前の年会費の納入が芳しくない状況が続いております。今年 5 月に全国大会のプログラムと一緒に年会費納入のお願いを致しましたが、2007 年度（以前）の年会費が未納入の方は、なにとぞ納入をお願い申し上げます。

振込先（郵便局）

加入者名：日本「アジア英語」学会

口座番号：00280-8-3239

年会費は、正会員 5,000 円、学生会員 3,000 円

年会費に関してご質問がございましたら、会計担当の加藤理事（mihoko@hse.tut.ac.jp）までご連絡ください。

2. 2008 年度研究助成プログラム（本年度申請分）の中止について

2004 年度から毎年実施してまいりました研究助成プログラムですが、本年度は学会財政が非常に逼迫しておりますので、本年度の募集（2008 年度支給分）は中止させていただくことにいたし

ました。事務局をはじめ各事業担当者も、いっそう冗費節減につとめて、出来るだけ早く助成金プログラムを再開させますので、会員の皆様にはご理解を賜るようお願い申し上げます。

ニューズレター編集担当より

今回の JAF AE ニューズレター 24 号は、1 月中旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800～1,200 字程度で奮って投稿下さい。画像（解像度高いもの）も大歓迎です。是非ご投稿ください。

書いてみようというご意欲がありましたら、12 月上旬までに編集担当（相川）までお知らせください。アドレスは aikawa@nnc.or.jp

【編集後記】

長井健司氏がミャンマーで銃殺されました。アジアの悲しいニュースには無関心ではられません。我々「アジア英語」研究者も、現地事情を日本に伝える意味では一種のジャーナリストかもしれません。アジアの平和を祈りつつ、長井氏のご冥福をお祈りしたいと思います。

2007 年 10 月 20 日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

印刷 (有) すずぎ印刷

事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘 1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi,

Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239